

「アートプロジェクトの印刷デザイン研究・大学のアウトリーチ活動に対する広報のデザイン戦略に向けて」

報告：鍛澤達夫

平成 21 年度特定研究「アートプロジェクトの印刷デザイン研究・大学のアウトリーチ活動に対する広報のデザイン戦略に向けて」

研究代表者：鍛澤達夫

研究分担者：大井健次（芸術学部教授）

柳 幸典（芸術学部准教授）

加治屋健司（芸術学部准教授）

中村 圭（芸術学部非常勤助教）

今井みはる（芸術学部協力研究員）

岩崎貴宏（芸術学部非常勤助教）

古堅太郎（芸術学部協力研究員）

研究協力者：齋藤彩佳（芸術学部協力研究員）

鹿田義彦（芸術学研究科大学院生）

深山大智（芸術学研究科大学院生）

3. 「広島アートプロジェクト」の出版物

研究代表者が所属する芸術学部の現代表現領域の教員は、毎年、広島アートプロジェクトを実施している。複数の教員が中心となって、非営利の出版社（日本図書コード管理センターが定義するもので、一般にいう「出版社」と対応しない）として、「広島アートプロジェクト」を試験的に立ち上げている。本研究は、2007 年の『旧中工場アートプロジェクト』（「ゴミがアートになる！ 超高品質なホコリ」展、「わたしの庭とみんなの庭」展、「金庫室のゲルトシャイサー」展）に於ける出版物をケーススタディーとして、アウトリーチ活動を広報するために必要な印刷物とデザインのあり方の研究を続けている。

下の 2 冊と右の 1 冊が、現在の出版物である。

はじめに

本研究報告は、「アートプロジェクトの印刷デザイン研究・大学のアウトリーチ活動に対する広報のデザイン戦略に向けて」は、本学の芸術学部の教員が行っているアウトリーチ活動を広報するために必要な印刷とデザインのあり方を研究するものである。

1. 従来型の研究報告書

アートプロジェクトは、特定研究費や外部助成金を得て、ポスター、チラシによって告知し、開催後に「研究報告書」を出版していた。こうした取り組みが、大学のアウトリーチ活動の広報において必要かつ十分な条件を構成していると考えられてきた。

2. 大学間競争での重要性

大学間競争が激しくなりつつある現在、大学のアウトリーチ活動広報、とりわけ成果報告の広報の重要性は高まっている。従来の研究報告書は、地域住民や他の高等教育機関の目の届かないところで流通しており、広報としての機能が戦略的に意識されていなかった。仮に目に触れる機会があったとしても、実際に興味を惹かないものでは、広報として機能しているとは言いがたい。数十年にわたって残る印刷物は、長期的な視点に立てば、広報として重要な意味を持っている。



『旧中工場アートプロジェクト』
（広島アートプロジェクト、2007 年）
B5、DVD 付、278 ページ



『広島アートプロジェクト 2008 汽水域』
（広島アートプロジェクト、2009 年）
B5、276 ページ



『広島アートプロジェクト 2009 いざ、船内探検！ 吉宝丸』
(広島アートプロジェクト、2010年)
B5、296ページ

4. 今後の展開

大学の関連事業の印刷デザインは、デザインの方法としては、一般の書籍や雑誌と区別されることなく、デザイン的なセンスや新しさが重視される傾向にあった。本研究は、「大学のアウトリーチ活動を宣伝するのに適した印刷デザインとは何か」という視点に基づいて行われている点に独創性があり、地域社会や高等教育機関だけに留まらず、「広島アートプロジェクト」の出版物に於いては、展覧会を観ていない一般の方々に対しても十分その臨場感を感じてもらえる内容の充実と、出版物の販売に関しても、インターネットをはじめ専門的な小売店からの販売も行っている。このように大学で出版される書籍の流通には、単なる研究報告書としての内容から、大学の広報活動として、国内だけに留まる事なく今後も内容の展開を計って行きたい。

5. おわりに

また、東京芸術大学の教員が関わる「取手アートプロジェクト」は、印刷物研究所を設立して同様の活動を始めている。そうした先行事例をふまえて広島市及び広島市立大学において必要とされる印刷デザインの方向性を明らかにして行きたい。